

研修の概略(スケジュール、主な内容など)

【11月1日】

・会場: 島根県民会館 ・参加者: 400人ほど(うち9割が単位のために来た大学生)

13:00~13:35 オープニング

13:40~14:50 基調講演「新しい学習指導要領とボランティア活動」

梶田 叡一(兵庫教育大学長、中央教育審議会副会長、島根県松徳学院理事長)

15:00~16:50 シンポジウム「『学ぶ力』を育てるボランティア学習」

◆ シンポジスト

・高岡 伸也(島根大学教育学部長)

・多田 元樹(千葉県教育庁南房総教育事務所指導室長)

・山田 貴子(子どもネットワークセンター天気村代表)

◆ コーディネーター

・齋藤 ゆか(聖徳大学人文学部講師)

16:55~17:25 アレックディクソン賞授賞式・発表会

【11月2日】

・会場: 松江市民活動センター

9:00~10:00 自由研究発表

(1) ボランティア活動の支援と地域教育コーディネーターの役割

星野 幸雄(島根県教育庁生涯学習部社会教育振興グループリーダー)

(2) 城西公民館の試み

森 泰(松江市城西公民館長)

(3) 大学と地域の連携・共同の構築に関する研究

~2007年・2008年西濃地域ボランティア学習大会を通して~

樋下田 邦子(岐阜経済大学経済学部講師)

10:15~12:05 分科会

第1~第5分科会まであったが、第2分科会「サービスラーニングと新たな教育システムの構築」参加

12:10~12:40 全体会、閉会

研修の内容のポイント

【11月1日】

1. オープニング

ステージに主催者代表と来賓代表が座って挨拶

＜主催者側＞

興梠 寛（日本ボランティア学習協会）

島田 まさはる（？） ※口頭での紹介のため不明

＜来賓側＞ 島根県知事、松江市教育委員会長、島根県社会福祉協議会長、松江市社会福祉協議会長

1-1. 興梠さんのあいさつ

- ・島根は福祉教育発祥の地
- ・ボランティア学習の起源は、アレックディクソン
- ・ボランティア学習を通して、子どもたちが「生きる力」を培う
- ・ブレア政権では「市民教育」
- ・アメリカでは「サービスマーケティング」
- ・日本でも、大学に「サービスマーケティングセンター」「ボランティアセンター」が増えている
- ・島根では、大学や高校で、サービスマーケティングに積極的に取り組んでいると聞いている
- ・2000年の「教育改革国民会議」が、現在の教育改革のベースになっている
- ・2006年、教育基本法改正 「公共の精神」
- ・2007年、学習指導要領改正 「生きる力」
基礎学力の習得、学力を生かす、学習意欲を高める
→知的学習とボランティア学習をリンク
- ・「学ぶ力」を育てるために、ボランティア学習がどう役立つのか？
そのためのNPO、市民団体の役割は？
- ・「100人村」だと、大学に行けるのは100人中1人
学生たちには、
「あなたたちは、自分のためだけに学ぶのか、それとも99人のために学ぶのか？」
と問っている。
- ・自分のためだけに学び、生きる時代は終わった

1-2. 島田さんのあいさつ

※この人は、たぶん松江の教育界で影響力のあるおじいさん

- ・ボランティアについて、皆が声高に叫ばないといけない現在は、さびしい時代
- ・小学生の頃（昭和10年代）は、地域の寝たきりのおばあちゃんのために、日替わりでみんなが食事、洗濯等をしていた
→誰も「ボランティア」とか意識せずに、自然に人のために生きていた
- ・現在は、豊かさを「他者のため」ではなく、「自分のため」に消費している。
- ・島根県は、全国でトップレベルの高齢者が多い県

→本当は、家族でなんとかすべきであるが、現状は難しい。だから、ボランティアの役割が大きい

1-3. 島根県知事・溝口善兵衛さんのあいさつ

- ・昨年、長年住んでいた東京からUターンして知事へ
- ・島根県は、公民館での活動が非常に多い。
- ・逆に、東京では、住民がみんな仲良く活動する文化が、ほとんど衰退しているように思う
- ・島根では、県政の一つに「社会貢献活動」を重要視している
- ・職員にも、社会貢献活動への参加を促している「もう一役運動」

1-4. 松江市教育委員会長・福島律子さんのあいさつ

- ・朝ドラ「だんだん」を見ながら、
「自分たちは、日頃、そんなに『だんだん(ありがとう)』と言っていたっけ?」と感じている。
→感謝する心をどれだけ表現しているか。
- ・今こそ「生きる力」が非常に大切

2. 基調講演「新しい学習指導要領とボランティア活動」

- ・昔は、確かにボランティア活動は、声をあげずとも自然にできていた
でも、今は声をあげないといけない「社会貢献活動」「ボランティア活動」の大切さを！

○ボランティア学習のポイント「自分の利益にはならない」

- ・別に、ボランティア学習をしたからといって、成績が上がるわけではない
- ・でも、自分のために勉強することが、ホントに幸せか？
以前から高学歴のエリートたちが、多数自殺している
- ・はっきり言って、
「いい学校、いい大学、いい会社に行って、いい役職につけば幸せになれる」というのは、単細胞な発想
- ・仕事を退職してから、充実した人生を送れるかが大切
人生には「余生(余分な人生)」はない。人生の全てのステージが充実していないといけない
- ・充実した人生→「自分の存在意義」を感じることができる人生
そのためには「隠匿を積む」ことが大切
- ・また、充実した人生のためには、たとえ自分が寝たきりになっても、共にいてくれる仲間が必要。
そのような仲間は、自分の利益、利害を超えたところでしか生まれない
- ・(なぜが突然)宮沢賢治の話に
「法華経の精神で生きる」(宮沢賢治)

○法華経の話し

- ・地面から、菩薩(仏になろうとする人)が出てきて、他のために生きる
→人が仏の精神に目覚めるために、自分が何ができるか
→そうした「菩薩道」の中に、ボランティア精神がある。
- ・今は、菩薩道を意図的に、ボランティア学習として取り入れないと、声高に叫ばないといけない
- ・2000年の「教育再生国民会議」。この内容を元に、教育基本法などを改正した

- ・(講師の梶田先生は)1990年は、強く文部省(当時)を批判していた
ゆとり教育への批判

→当時の文部省「子どもの目がキラキラすればいい。子どもたちが勉強したくなるよう、アシストすればいい」

- ・その点で、「教育再生国民会議」は、ゆとり教育とは 180 度違う
- ・現在、小中学校の指導要領は改正済み。来年4月から実施。
高校の指導要領は、政権の様子を見て、改正を保留している

○改正のポイント

①子どもたちに、もっと勉強させる

②そのために、先生のレベルアップを図る

- ・日本は、昔も今も、資源や食料を輸入している。

その中で国際競争力をつけるには「技術力」で勝負するしかない(トヨタとか)

→ゆとり世代の大人たちに、それが可能か？

- ・京大では「全学教育委員会」をつくって、高校時代の補習をやっている(理科、数学、英語)

→京大では、世界に通用する人材を育成したいが、ゆとり教育時代当時の学生のレベルは、もう悲惨そのもの

・大事なのは「勉強して賢くなる」ことが、自分のためだと考えさせないようにすること

- ・勉強して賢くなることで、人のために貢献する。これをタテマエではなく、ホンネにさせないといけない

cf) 曾根綾子「日本人へ」

- ・国民会議の時点で「伝統」についても盛り込んでいる

自民党も民主党も、同じ資料から教育改正案を作っているの、どちらが政権を取っても、教育方針は変わらない

- ・別紙講演資料にあるように、新しい学習指導要領には、ボランティア活動については盛り込まれている。

- ・では、ボランティア活動とは、具体的にどんなことがあるか？

(例1) 京都市長になった、角川さんという人

- ・「勉強会」なるものをつくっている(やっつことはトイレ掃除)→素手で掃除する

- ・似たような運動は、アジア各国にあるらしい

(例2) 清掃活動、空き缶拾い

- ・「何の役にも立たないけれども、あえてやる」という精神が大切

(例3) 留学生に対する支援、国際交流ボランティア

- ・アフリカでは、今なお多くの方がエイズや結核で亡くなっている

- ・世界の現状を、「痛み」を知る教育も重要

- ・いずれにせよ、「人のために何ができるか？」を、探していくことが、ボランティア学習

○まとめ

- ・学校は「勉強するための学校、賢くなるための学校」

- ・そのために、先生の力量が問われる。教員養成の仕組みも変更。 ex)10年単位で、免許のチェック

- ・ただ、「自分のために学習する」という要素を、いかに排除していくか。

- ・学校全体が、ボランティア学習になるような、そういった雰囲気をつくらないといけない。

3. シンポジウム「学ぶ力を育てるボランティア学習」

<シンポジスト>

- ・高岡 伸也(島根大学教育学部長)
- ・多田 元樹(千葉県教育庁南房総教育事務所指導室長)
- ・山田 貴子(子どもネットワークセンター天気村代表)

<コーディネーター> ・齋藤 ゆか(聖徳大学人文学部講師)

3-1. 全員の自己紹介

(齋藤)

- ・ちょっとだけ自己紹介。

プロダクティブ・エイジング(定年退職後のボランティア)をどう進めるかを研究

(多田)

- ・指導室長の立場として、学校に行くとき、学校では2つの顔を見る

① 玄関 ②トイレ

- ・続いて、教室では3つの顔を見る

①子どもの顔 ②先生の顔 ③黒板

→これらに問題がなければ、その学校は大丈夫と判断している

(山田)

- ・「天気村」の由来→人生は、天気のように分からない

- ・大人も子どもも、何も変わらない。同士。

- ・2000年になったとき、「すごい時代に生きている」と実感

(高岡)

- ・今回、島根大学生が200人以上来ているが、自分が単位と引き替えに呼んだ

※このあと、シンポジウムの進め方の紹介

各自シンポジストが20分ほど話し、そのあと質疑応答

3-2. 多田さんのお話

- ・大事なものは、子どもたちに「学ぶ力」をつけるための条件整備

行政と学校内の2つの側面での整備が必要。

<学校内> 教育計画に「学び」の要素を入れる。入れているようで、案外入っていない

「中谷 宇吉郎(なかや うきちろう)」さんという、雪の博士とも言われる人の台詞

「不思議を解決するよりも、不思議を感じさせる方が難しいし、大切ではないだろうか」

ボランティア学習は、不思議を感じさせないといけない

- ・道徳特別活動、総合的な学習の中にボランティア学習

- ・別紙資料にも記載した、3つの視点が必要

① 地域の大人や保護者の参加とともに、異年齢の子供間の交流を多く取り入れる

② 発達の段階や活動内容に応じ、なるべく企画の段階から子どもを参加させる

③ 多様な活動メニューを用意し、子どもたち自身に選択する機会を持たせる

- ・企画や運営まで完成された学習セットは「おもしろみ」が少ない
 - ・子どもの存在感を持たせる、主体的に選択させる
- 学校だけではなく、家でもこの「存在感」「主体的な選択」が必要

<学校外>

- ・地域と家庭が一緒になって教育 「学校支援ボランティア」

3-3. 山田さんのお話

- ・子どもは、もともと「生きる力」を持っている。自然に立つことができる。
- 親は、それを見て、親も「生きる力」を感じる
- ・親は、つい子どものために、人生のレールをしきがちになるが、それは「学ばされる力」であって、「学ぶ力」ではない。
- ・自然体験の中で、コミュニケーション能力、子ども主体の危機管理能力を学ばさせる
- ・プログラムは、直前まであえて決めない。その場で、子どもたちの様子を見て決める。
- また、子どもたちの様子を見て、すぐに行き先も変更する
- ・大人側の危機管理は、全くしない。放任主義。怪我しても、放っておく
- 「黙ってりゃ、治る」
- ・地域も、そうした状況を応援してくれる
- ・「滞りなく」では、学習はできない。
- ・体験の一つ一つに、学びの節目がある。
- けがしたときや、ひよこが生まれたとき など
- ・人は、ちょっとしたきっかけで、変わることができる。
- ・子どもを通して、大学生のボランティアが変わっていく。
- 子どもの要求（「座席の下に落ちたどんぐりを取って！」「かえるを取ってきて！」）に応え、子どもが喜んでくれたときに、大学生も変わることができる。

3-4. 高岡さんのお話

- ・島根大学では「1000 時間体験学習」というのを行っている
 - 学生では、もう「1000 時間」と略称で呼ばれている。
 - ・言葉が縮められるのは、言葉の背後の文化が共有されている場合と、単にめんどくさいから、という2つがあるので、注意が必要ではある。
- <1000 時間の内訳>
- ・教育実習が 400 時間
 - ・「子どもを理解する力(カウンセリング・マインド)」の育成に 150 時間
 - 知識と体験(子どもの目線に立つことの大変さ)
 - ・あとの時間で学外のボランティア活動
 - ・教師力を育てるためには、社会教育体験が大切(その中の一環にボランティア活動)
 - ・大学の外に、学生が飛び出すことの重要性
 - ・以前は「教員免許をとらせ、教員試験に受かる人材をつくれば、大学としてはそれでいい」と思っていたが、本当にそれでいいのか？ →これらは、最低限の資格
 - ・「たとえ教員採用試験に落ちてても、先生として一人前」といえる人材を育成
- ・なぜ「1000 時間」か？

→看護師、看護婦の育成には、実習 1000 時間が必要。先生も同様のはず！

<教師になるための4つの力>

- ① 社会人としての成熟性
- ② 「生物(なまもの)」としての子どもに接するための、臨機応変力(なまもの、とは、繊細なといったニュアンス)
- ③ 専門性
- ④ 科学や文化を本気で学ぶ姿勢、飽くなき探求心

- ・何があってもひるまない精神が大切。
- ・「放牧」の精神→管理指導では不十分

3-5. 質疑応答

Q:個人的には、子どもは放任で育てるのが良いと思うが、周りの大人は「安全」を求めるはず。

周りにどう働きかけているのか？

A(山田)

- ・大人は、子どもに対して「理想的なイメージ」を押しつけがちだけれど、まずは、そのイメージを捨てる必要がある。
- 恋愛関係のように、子どものいいところも悪いところも、受け入れる関係が大切

A(多田)

- ・子どもは、学校の顔と、外の顔がある
- ・結局は、地域と学校の連携が大切

A(高岡)

- ・教育には「成果」「効果」が必ず必要。
- では、「その場で予想、管理できる効果」がよいのか、
- それとも「その場で予想、管理できない効果」がよいのかは、ケースバイケース。

Q:「評価」についてどう思いますか？

A(山田)

- ・こちらの思惑での評価と、子どもたちの努力とが一致しないことが多々ある。
- 満足主義ではなく、3割主義で教える
- ・今の子どもたちにとって「大人」とは、両親、先生、塾の先生しかない。
- それ以外の「大人」にどう接させるか
- ・地域社会の中で、異質なものを受け入れる、そのような場が必要である
- そうすると、人の評価を必要とせずに、自分の評価で動くことができるようになる

Q:「学校支援ボランティア」では、具体的に何をやっているか？

A(多田)

- ・その前に、評価について私も答えたい→評価の「姿勢」が大切
- ・突然、参加していた学生たちに質問「教えることと、学ぶこと、どちらがより難しいか？」
- (学生たちは、ほぼ7割方「教えること」に手を挙げる)
- ・確かに「教えること」は難しいが、自分が学ぶことは、実はもっと難しい。

→自分が謙虚にならないと学べない

- ・ボランティア学習では、子どもたちが「素直な力」を持つ、きっかけをつくる
- ・ボランティア学習を通して、ボランティアする側が学ぶ。

A(高岡)

- ・「ボランティア学習」と「ボランティア」の違いは何か？
- ・ボランティアとは、
「日常生活では絶対に出会うことのない人との出会い」
- ・1000 時間の前に、そもそもボランティアとは何かを学生に伝える必要があるかも。

Q:今は、先生が非常に精神的に大変な状況にあるが、そのために地域ができることは？

A(多田):

- ・先生に対して心配してくれる近所の人がいること自体が尊い。
今は、コメントできない。

Q:今後、どういった地域と学校の「学びあい」があるか？

A(多田)

- ・ふつう、「地域と学校のかかわり」というと、「子どもと地域」であるが、
先ほどの質問も考えると「先生と地域」という観点も必要かもしれない

A(高岡):

- ・1000 時間でも、ボランティアの受け入れ先も大変だということは知っている。
けれど、将来的には、互いに Win-Win の関係になるはず

A(山田):

- ・あまり、評価とか教育とかをごちゃごちゃ考えない方がいいと思う。
- ・動物だって、教科書や教育なしに、自然に育つ
- ・大人の都合で評価してはいけないと思う。学びには答えはない。

Q:最後に、「学ぶ力」とは何だと思うか？

A(多田):

- ・それは「段取り力」
- 今の学生は、飲み会の設定もできない

A(山田):

- ・学びとは、楽しいもの、おもしろいもの
- ・けれど、今は学びに金属疲労が入っているのではないか

A(高岡):生涯をかけて、学ぶものを見つける能力

4. アレックディクソン賞授賞式・発表会

○賞の講評

- ・今年で4回目になる。
- ・応募は5件で、これまでで一番多かった。かつ、どれも優秀であった。

【11月2日】

1. 自由研究発表

<発表者>

- ・星野 幸雄(島根県教育庁生涯学習部社会教育振興グループリーダー)
- ・森 泰(松江市城西公民館長)
- ・樋下田 邦子(岐阜経済大学経済学部講師)

<司会> ・澤 アツ子(21世紀職業財団島根事務局長)

1-1. 星野さんのお話

- ・現在、社会教育主事になって11年目
- ・地域教育コーディネーターでもある
- ・現在、教員かつ社会教育主事という人は250名ほど。
うち、53名ほどが、さらに行政と地域の連携のために活動している(通称「アナログ戦士」)
- ・平成18年に教育基本法が改正。
→「学校・家庭・地域の連携」「学校への支援」「家庭教育への支援」
→これらの解決のために、アナログ戦士たちが活動している。
- ・「学校支援地域本部事業」は、中四国では一番進んでいる。
- ・足を動かして、顔を会わせて、ボランティアを掘り起こしたい

1-2. 樋下田さんのお話

- ・2006年に岐阜経済大学に赴任してから、学生をたきつけて「HIGE☆BU」を創設
- ・2007年には「ボランティア学習大会」を開催。参加団体を集めるのが大変
- ・つながりは待つのではなく、自分たちから動き出して作り出す

1-3. 森さんのお話

※基本は、ずっと公民館活動の写真をスライドショーにして発表

- ・若いお母さんと子どもにも、広く門戸を開いている
- ・中学生を受け入れる努力をしている
- ・去年から、お年寄り対象の麻雀もやっている。
- ・おじいさん向けの料理教室も人気
- ・米からお酒も造っている
- ・韓国との交流もやっている
- ・アイルランドの国際交流もやっている
- ・何事も、継続は力なり

1-4. 質疑応答

Q:「人が育つ社会づくり」とは？

A(樋下田):

- ・ボランティアを通して、する人が「気づき」を得る
- ・人の持つ強さを引き出す

Q:松江市では、公民館職員は退職した教師がやっているのか？ また、退職教師を活性化させるには？

A(森):

- ・松江市では、ほとんど退職した校長先生とかが公民館長をやっている
- ・みんな、熱心だけれど、その分逆にまじめすぎて、枠から出ない活動しかしない。
私は不真面目だから、枠を外して活動している

Q:学生ボランティアの受け入れ先を探すための工夫点は？

A(樋下田):

- ・こちらでは、主に社協からボランティアの依頼が多数来る。
しかし、その分ジャンルが福祉に偏っている。

2. 第二分科会「サービスマーケティングと新たな教育システムの構築」

<発表>

- ① 産学官民が連携した学生の社会参画力育成の展開 ～学生と共に創る「子どもイベント」～
齋藤 ゆか（聖徳大学人文学部講師）
- ② 交流力を深める読み聞かせ活動
岩田 英作、マユー あき（島根県立大学短期大学部松江キャンパス准教授）
- ③ 世界と向き合う一歩を踏み出すための総合的学習
中村 訓子（島根県立松江南高等学校教諭）

<助言>

- ・興梠 寛（昭和女子大学教授）
- ・池田 幸也（常磐大学コミュニティ振興学部教授）

<司会> 川津 愛子（島根の教育を愛する会）

2-1. 発表1 「産学官民が連携した学生の社会参画力育成の展開」

- ・これまで、大学は「閉鎖的な教育・研究機関」→今は、大学が「開かれる」ことが求められている
2001年→2006年で、学生ボランティアの数は減っている
- ・インターフェース組織を最初に作ろうとしたときに、大学側は「前例がありません」で拒否。
しかし、今は「どんどんやってほしい」と言われている
- ・学生に、ボランティアについてのイメージを聞くと、ほとんど「やらされたもの」というイメージが強かった。
- ・最初に「探す・みつめる・考える」→まずは、自分について知らないとならばボランティアはできない
- ・「キー・コンピデシー」:1997年に提唱

「相互作用に道具を使用」→学力をつけること

○質疑応答

Q:「ボランティアをキャリアに生かす」授業は、どんな学生が受けているか？

A:いろいろな学生(ボランティアをしたことがない、しても清掃)が受講していて、150人→80人に減ってしまう

2-2. 発表2 「『交流力』を高める読み聞かせ活動」

- ・大学生の「絵本の解釈力」を重視。事前に学生に解釈させる
あいさつ、その際の態度も含めて「コミュニケーション」
- ・読み聞かせる本は学生に選ばせているが、状況によってチェック
模擬実践も重視している
- ・参加する学生の中には、子ども嫌い、話し嫌いを克服するために参加する人もいる
模擬練習を通して、相互振り返り

- ・楽だと思ったけどつらい→でも脱落者はゼロ。子どもの反応が自信になる

○質疑応答

Q:読み聞かせの際に、子どもとの言葉のキャッチボールをやっているか

A:

幼稚園での場合、自然に子どもが話しかけてくるが、
小学校の場合、時間が10分しかないため、キャッチボールはできない

Q:大学生が、小学校高学年とかに読み聞かせを教えることも可能ではないか？

A:課題ではあるが、現在はできていない

Q:英語での読み聞かせはやっていないのか？

A:別の先生がやっている(キッズ・イングリッシュ)

Q:そもそも、授業の評価はどうやっているか？

A:

- ①「作品解釈ノート」「実践ノート」「実践記録ノート」
- ② 本番の様子

2-3. 発表3 「世界と向き合う一歩を踏み出すための総合的学習」

- ・JRC(日本青年赤十字部)
- ・自分の前任者は、「車いすマップ(ここがあぶない、等のマップ)」「車いすのためのトイレマップ(このトイレは使いやすい)」をつくっていた。
- ・JRCでは、救命法などの講習会も行っている
- ・「気づき」「考え」「行動する」:この3点は、赤十字では非常に重視されている
→高校生たちに「気づき」を与えるのが難しいのでは、と予想された
- ・「気づく」ための回路を開かせるために

- ① 心の琴線にふれる体験をさせる
- ② 「人ごと」に終わらせない
- ③ 自分の言葉として表現させる→感想を表現させる

・琴線に触れさせるため、講演「戦争と人間」では、生々しい写真をたくさん見せた

・また「無関心が地球を破滅させる」をキーポイントとした

→まずは「知ること」の必要性に気づいてもらう

自分にできることを考えてもらう。それが未来につながる

・最後に:私のやったことは「種をまく」ということ

※時間の都合上、質疑応答はなし

2-4. 池田先生総括

・3つの発表のベースは、「関わる人々」の自らのあり方を確かめていくこと

・評価(学習の成果)をどのようにしていくか。今回は、そのヒントになった。

・体験学習をした生徒が、次にどのようなアクションを起こしていくか。また、それをどのように支援するか。

・一人でやる→2~3人でやる

この段階で学びのステップが上がっていく

・「学び」をどう成り立たせていくか →おもしろくない「学び」では、成り立たない

2-5. 興梠先生総括

・「新しい教育システム」をどうつくっていくか

・「市民活動」「中間支援組織」「大学」:この3者の連携が大切

・サービスマーケティングには、アメリカでも200通りの考え方がある

ただ、基本の「課題」「課題解決のためのボランティア活動」「そのプロセス」の3つは変わらない

・学生の視点からフォーカスできるように

学生の「自分の探求」が最初。そこから初めて「社会・世界の探求」が可能になる

3. 全体会、閉会式

○第一分科会まとめ

・島根大学の「1000時間」を通して、学生に多様な選択を与えてくれる。

・「ボランティア学習」と「ボランティア活動」のすみわけが必要

学生にとっては「ボランティア」という言葉を使わない方が、かえって意味がわかりやすい、というケースもある

○第三分科会まとめ

・「なぜ青少年を教育するのか」をもう一度問いなおす

・グループでの「つながり」の強化の必要性

・ボランティアを通して、昔の「若衆組織」を復権

・子どもボランティアは、大人がボランティアをする入り口になる

親子ボランティアなど

・大人側の「ボランティア」に対する認識は、ある程度まとめておく必要がある

○第四分科会まとめ

- ・「支援人」を養成する塾をやっている
- ・「自分たちでやってみよう！」という意気込み→それがプライドへ
- ・町全体で「人間力プロジェクト」をやっている →「自立」「挑戦」「交流」
- ・中学生を対象に、修学旅行中に一橋大学の学生との交流もやっている
- ・現在、卒業生のリターンが増えている
- ・ボランティアコーディネーターを配置し、学校を中心に活動
 - 「できる人に頼む」「まずは楽しむ、やってみる」
 - 「やったことはできる、やってないことはできない」
- ・全ての発表に共通するのは
 - 「まずは動いてみる」「多くの仲間をつなげる」
- ・ボランティアにはミッションが必要。そのキーワードは「人間関係力」
- ・「学ぶ力」とは？
 - ① 人間関係を結ぶ
 - ② 異なった価値観を受け入れる
 - ③ 自分で学ぶ

○第五分科会まとめ

- ・CSR: 自分の専門性を地域の活性化に生かす
 - 今後は、地域の人と一緒に CSR: 自分に取り組みたい
- ・地域の NPO と企業でネットワーク。企業のオフィスが、事務所になる
- ・企業は、この 30 年間で大きく変わった。
 - 企業と民間、行政が手を組めば、大きなことができる

○興沼先生全体総括

- ・人間は「他の人に役に立ちたい」と考えている→ボランティア精神の根本
- ・絶え間なく生まれる社会課題を解決する力
 - それを考える上で「キー・コンピデシー」が必要
- ・教育を「する側(先生)」についての議論は盛んだが、
 - しかし、「教育される側(生活者、当事者)」にたった視点が抜けていることが往々にしてある
- ex) 学生と接するときは、視点を学生に向ける
- ・ボランティア学習とは
 - ① 自分の発見
 - ② 社会の発見
 - ③ 学びの発見
 - この3つが、スパイラルに発展している
- ・現在、学生は「自分の発見」に非常に苦しんでいる
 - 進路について悩むことももちろん大切だが、それ以上に「どんな人間になるか」を悩むことがもっと大切
 - これらを考える上で、ボランティア学習が大切
- ・「きれいな学習計画」は、見た目はすばらしいが、
 - 実際は、他者との関わりの中で、必ず「コミュニケーション・ジレンマ」が生じる
 - 自分の無力さ、相手との無理解、こういったことを感じることもある

→本当は、この中で学ぶことが尊いが、

ともすると「きれいな学習計画」をつくる上で、こうしたジレンマを排除するように計画しがち

・地域には、たくさんのすばらしい先生がいる

・モデルケースをもっと増やす

・社会問題を解決する力がある4つの組織

① 血縁自演社会

② 行政

③ 企業

④ ボランティア(市民活動)

・今後は、企業の持つ役割が増えていく。CSRのみならず、社会企業(ソーシャル・エンタープライズ)